

芥川だより

発行日 * 2020年11月1日 e-mail: ab_87968624@yahoo.co.jp

最新号から創刊号まで閲覧できます。 <http://akutagawadayori.sakura.ne.jp/>

編集 川口 伸

印刷・発行 下村嘉明

〒661-0951

尼崎市田能5-3-10-601

☎090-8796-8624

***** 一部200円です *****

自分と向き合うおもしろさ



若い時は、何事にも人と比較して喜んだり落胆したりしたが、今頃になってやっと自分と向き合い心に潜む自分の声と対話する面白さが分かってきた。これまで困ったことがあるとすぐに誰かれなしに相談を持ち掛け早急な答えを求めていたが、なかなか納得できる答えが得られず他人を小バカにしてきた。こんな私の性格を見て亡き母は「他人をバカという者がバカじゃ」と幾度も私をたしなめたものだ。

幼いころから小さな村の大人たちに対する好奇心が強く、裁縫の内職仕事をしている母の隣に座って、「村で一番賢い人は誰や？隆太郎はんか？」と聞く私に「そうやなー、きっちよまはんも賢い人やけど…。よう知らんわ。」隆太郎さんの嫁さんはどこから来とってんやいな？」「才原じえー」「嫁さんは何人兄弟なん？」「確か、男二人女一人…。仕事が出来へんさかい、あっちへ行ってくれ」と母はいつものように言う。

私が村一番の賢い人を探していたのには理由があった。幼いながらも会って問答がしてみたかったのである。法事に来た坊さんや親せきの叔父さんたちでは、どうも話が合わずもう少し話の分かる爺様が欲しかったのである。村の大人たちを品定めするかのよう、あれこれ母に聞くのが私の楽しみでもあった。そして毎回のよう「大した人がおってないなあ」と小ばかにする

大病を患い大ケガもして人並みの苦労は出来たかもしれない。これらの経験から学んだのか歳を重ねた結果なのか分からないが興味は深まるのは、自分に潜む心だ。老いても我欲に魅かれる心となだめすかす心、傍観してきている心など。いくようにも変化し続ける自分の心にあてどない面白さと恐れを感じる。心が居場所を失い漂流するのを防ぐには、日々己を追い込み、身体を鍛え、迷いを洗い流すのが一番と考えて運動に余念がないのだが、傍観する心は私を小バカにして笑っているように思えるから厄介だ。

死をめぐるあれやこれ (72)

石川 吾郎

東京夢華録、あるいは歴史は繰り返すか

かねがね読みたかった本を、このほど秋空の下、百万遍の古本市で見つけてゲットした。『東京(とうけい) 夢華録』著者・孟元老が生まれ育った中国・北宋の首都(現在の開封市。東京(とうけい)とも呼ばれた)の繁栄ぶりを、後年、老年になった著者が思い出として詳細に書き綴った。執筆当時には、舞台である北宋はすでに他民族に占領され亡び、この世から姿を消しており、著者は南宋へ逃げのびていた。そのことが、記述をより切ないものになっている。その序文を読んでいてドキッとさせられた。「太平の日は久しく、人も物も盛りを極めていた。稚児まげの童は、ひたすら歌舞を稽古し、ごま白髪の翁は、戦争の経験もなかった」とある。

この状況、我々はどこかの国で見えないか。「戦争を知らない子供たち」だった我らはすでにごま白髪の翁だ。また現代の若者たちは歌舞の稽古に余念がない。それから三十年ばかり後、故国は他国に占領されて亡び、そして当時の若者の一人が東京(とうきょう)の生活の思い出を書き綴るだろうか…。さて、歴史は繰り返さないものだろうか。

巻頭エッセイ	下村嘉明	1
巻頭コラム 72	石川吾郎	1
素老人☆よもだ帳 80	坂本一光	2
哲学叢いの時事放談 30	祖蔵哲	3
大峰奥駈道 36	下村嘉明	5
大人の今昔物語 73	石川吾郎	6
新型コロナウィルス愚考 (7)	明石幸次郎	7
オクラの山たより 50	因了生	8
隠された歴史 25	満田正賢	12
道をゆく 19	成瀬和之	15
編集後記	S K 生	17
ふみの道草 28	山椒魚	18
	土田裕	18
俳句	影山武司	18

素老人☆よもだ帳 (80)

坂本一光

◆日本の総理身内で選ばれる。そのうちに焚書坑儒もしかねない

アベ政治を継承し、その継承以外では前例にとらわれず大胆に規制改革を行い、「国民のために働く内閣」というスガ政権が発足した。ハンコ廃止や携帯電話料金値下げなど、線香花火のような「政策」をまるで大花火のように打ち上げている。テレビなどではそれを延々と実況中継するも

のだから、国民も首が痛くなるほど上を見上げさせられる。これは、国民への「足元を見るな。上を向いて歩こう」政策かい。

しかし、市井の民の中には冷静な批判の目がある。たとえば以下に引用するのは、地方紙に掲載された「読者の声」である。

前政権厳しく総括を

白杵将吉 (七十四歳)

◇新首相に就任した菅義偉氏は、7年8カ月続いた安倍政権を継承する姿勢を強調した。だが、まずは前政権を厳しく総括することから始めてほしい。

◇安倍晋三前首相は憲法改正、北方領土返還、拉致問題の解決などさまざまな重要案件に取り組むことを掲げていたが、いずれも成し遂げられないまま辞任した。病気の人をあげつらうことははばかられるが、「桜を見る会」や「モリカケ」など解明されたとは言い切れない問題が多い。過去のことで片付けるべきではないと思う。

◇「森友学園」の公文書改ざんに関与したことを苦に自殺した、財務省職員の妻は「真実が知りたい」と再調査を求めている。その声に耳を傾け、寄り添うべきではないか。

◇国民の疑惑や不信を招いては政治は成り立たないし、官僚の保身や打算による忖度が続けば、権力者の思のままだろう。われわれの幸せ、生活を良くするためには国はあるべきだ。

(二〇二〇年九月二十八日付「大分合同新聞」)

.....
これも前例打破の一つということであるらしい。学術会議をめぐる政権の威嚇と暴走には甚だしいものがある。

学術会議推薦の会員候補の任命に当たり「総合的、俯瞰的な活動を確保する観点から」判断して六名の任命を拒否したと言

う菅総理は、「推薦された会員候補を前例通りそのまま任命していいのか」と考えたことを明かした(ジャカルタでの記者会見での発言要旨)。前例通りそのまま任命するのが、学術会議の設置に関する法律上も、これまでの政府の解釈に関する国会答弁上も当然のことである。当然のことを変更しながら、任命権には拒否する権限もあると言うのは、ずる賢いだけの法の専門家がよくやる言葉遊びを越えた権力の乱用、法治主義の否定である。もちろん総理は、御乱心なのではない。気に入らない奴は飛んでもらう「官邸主導」手法の冷静な發揮なのである。

それにしても、この問題をめぐるテレビ等での賛否双方のコメントの数々は実に興味深い。

○BSフジプライムニュース (十九日)

「政権の監視が効かない組織が存在してはならない」(作家・門田隆将氏)

「自動的に決まるなら総理の仕事が形骸化してしまう」(猪口邦子自民党参議院議員)
「総理の側に選考の基準が別途あるなら示してほしい。それが説明責任です」

(大西隆東大名誉教授、学術会議元会長)

「総合的、俯瞰的に六人が不適格と言うなら理由をきちんと説明できるはずである。基準を示さなければ闇討ちのようなもの」(任命を拒否された六人の一人、岡田正則早大教授)

教授)

○TBSサンデーモーニング (十八日)

「公金が投入されているからといって、政府の意のままに動かなければならないとか、人事についても白紙委任を得たように独自に判断ができると言うのは、非常に危険な発想で、どうして六人を拒否したのか、きちんと説明する責任がある」

(目加田説子中央大教授)

「いま目撃しているのは、政治、政権の思いがりだ。民主主義の価値ということを、われわれ自身が踏み固めないと、この国はとて危険なことになると気が付かないといけない。権力がすべてなんだ、権力の言うことを聞くべきだという時代をつくってしまったら必ず道を間違える」

(評論家・寺島実郎氏)

○BS・TBS報道1930

「拒否した理由を説明しないまま、税金を使っているのにたてつくなどという声が聞こえてくる。このままでは、学問に限らず、文化芸術など公的資金を投入されているところに、萎縮効果ももっと広がってしまう」(松原耕一キャスター)

そもそも素老人が大学院を終えた一九

七七年頃は、学術会議に理学等の専門の部ごとに有権者として登録をした科学者たちが会員を直接選挙で選ぶ会員選挙という制度があった。駆けだしではあったが素老人も有権者登録をしたものである。それが政府の政策によって変更され、その概略を言えば、一九八三年の法改正で専門の学会による推薦制度に変わり、さらには二〇〇四年の改正では学術会議全体としての推薦制度に変更されてきた。素老人が大学生になった一九六〇年代後半に大学管理法案がもくろまれ、大学を去る三十年後二〇〇四年に国立大学の法人化によって国家統制が一つの完成を見たように、数十年をかけた学問に対する国家統制の完成に菅政権は踏み出したように見える。

言うまでもないことだが、政権の運営は国民の税金で賄われている。天に唾する者のあり方こそが問われなければならない。(かたちは心であり、心はかたちになる■大分の素老人)

哲学爺いの時事放談 (30)

祖蔵 哲

人間とウィルスの目的論哲学「共生の可能性」

今月号の時事も新型コロナから始まる。

COVID-19は2019年の末に確認されたから19という名称になっているが、世界がはつきりと意識しだしたのは2020年初頭からである。ということはあるから11カ月、もうすぐ一年が経過することになる。この時点で感染が確認された人は、世界全体で500万人、死者は120万人を上ってきている。世界規模感染流行いわゆるパンデミック歴史上の最悪は14世紀のペストで推定2億人の死者。3位のスペイン風邪5千万人、5位のエイズ3千万人から見ると死者数そのものは未だ少ないが、拡大範囲やその影響力は過去にも増して重大である。それは、最近よく言及されているが世界のグローバル化のマイナス面である。生産様式の世界的拡大は交通手段の発達を通じてローカルを席卷し地球規模で生活様式を統一化しつつある。そこには人間による自然資源の過剰利用や開発が前提となっており、それは自然破壊を伴う。この自然破壊による生態系の不均衡がウィルスを生み出し、それがグローバル通路を通じて全世界に伝染しているといつてという論理が何ら不思議でない説得力をもつ仮説となっているのが現在である。

夏季休暇を楽しく迎える前に厳格な都市封鎖をして一定の成功を収めた欧州は、それまでの抑圧的な生活から解放され羽目を外した夏のバカンスを過ごした。しかし、その結果、第二波はきつちりと反

ってきた。そして現在11月、欧州での感染再拡大は、各国を再度新たな都市封鎖に追い込んだ。専門家は、早すぎた規制解除、気の緩み、当局による周知の不徹底など、複数の誤りが拡大を加速する原因になったと指摘している。今また、感染が急拡大している欧州主要国が、軒並み1カ月程度の行動制限に踏み切る。各国とも消費が活発化するクリスマス休暇前の再開を目指して封じ込めを急ぐ構えのようだ。今回は夏季休暇による消費経済を期待して、今度はクリスマス商戦を期待して。ここでもやはり経済優先のための規制が先行している。「ウィズコロナ」、コロナとの共生という謳い文句に反して事柄は進んでいるようだ。

日本でも同じように「GOTO キャンペーン」が行われている。しかしこちらは期限がなく、目標もない。政策というものは「目標」「目的」を持つ「手段」であるべきであろう。そして当然それは「期限」が必要である。でないとその政策が有効であったのかという「結果」が検証できない。場当たり的、気まぐれな政策は「当たれば儲け」という博打と同じである。世界的にみて今のところ日本の感染率は低い。これが政策の成功によるのか検査数が少ないからかはつきりとわからない。でもこれが偶然なのか必然なのか依然として確認出来ないのである。さて「本論」である。今年に入ってからこの時事哲学のテーマは一貫して「ウイ

ルス」である。私たち人間は自身の生命を脅かす未知のウィルスに遭遇してはじめて、「目に見える死の危機」が身近になり、「人間の有限性」つまり自分は必ず死ぬのだということ再自覚した。いまさら再認識しなくとも「生命の有限」は生物学生命誌史上不変である。永遠に生き、死なない人はいない。しかし、我々は個々に「一回きりの生」として「人生」を生きるが人類全体の「生」は連続的である。その記録が「歴史」である。人類がどのように発生して、自然に適応するようになったか。さらに現在、人間は自然の生態系の頂点にいるがどのような過程でそのようなようになってきたか、またそれは今後そのままであり続けるのか。

「人間と自然」から「理性と本能」へ、「思考と感情」から再び「思考と自然」へ。人間は思考することにより常に自然を対立的に捉えてきた。その「思考」は古来「哲学」と呼ばれていたが、現在では「科学」がそれに代わりつつあるように思われる。「哲学の危機」である。しかし、この「コロナ禍」が再び「哲学」を蘇らせようとしている。それこそ科学が決して問うことができない「人間とは何か」の問いである。科学は「人間とはどのようなものか」だけに答えることができるのみである。

この「コロナ禍」がもたらした「死の不安」は、人間は本来「死ぬために生きる」という「不条理」にあるということ

を意識させた。このような「不条理な人生」に何か「意味」を求めるのが「人生の意味」の探求である。哲学入門書でも一般書でもこの手をテーマにした本はやたらに多い。圧倒的に何らかの意味があるという意見が多いが、前号で論議したカミュは少数派で意味はないという。あるのはただ「合理と不合理」のバランスを崩すこと「反抗する」ことだけでありのままを受け入れることに意味があるとしている。

(1) 「人生の意味」と「目的」

カミュは『意味』を一般的な『価値』として解釈した。世間や他者が評価基準となる損得という価値で考える「人生の意味」こそが無意味であるといいたかったのである。では外的に価値があるという「意味」でなく、自分自身の中での内的に価値があるという『意義』という「人生の意義」はどうなるだろう。内的な価値を求めるのが人生であるとする「人生の意味は何か」は「人生の目的は何か」に置き換えられそうである。個人人の目的達成が意義をもつという意味である。しかし、「人生の目的」といった場合、その目的が達成された「結果」は自分自身で確認することができないというジレンマに陥る。人間はだれも「人生の最終点」を認識できない。

哲学的には、「目的をもつ」とはいまだ実現されていない状態からそれを実現させようとする「意志のことである」。○○。大学に合格することが目的です」といった場合、現状は合格していないことであり、将来の結果は合格することである。ここでさらに哲学的に重要なことは「将来の結果」が実存すると確信に基づいているということである。『お姫様になることが私の目的です』という設定が意味を持たないのは「お姫様」が実存していないからである。目的は常に時間的な実存思考を伴っている。

(2) 目的論的歴史観

さて、このように個々の人間が様々な自分自身の目標「人生の目的」をもって生きるということが「人生の意味」であるとする。そのようなバラバラな「個」の集まりが地域的、「空間的」に「全体」となりそしてそれが「時間的」に経過することに「全体」としての「歴史」を形成するとそれもバラバラで意味のないものになるのであろうか。すなわち個々バラバラの「目的」が集まり「全体」を形成するときその全体が「目的」をもつということがありうるかということである。

「目的論的歴史観」とは『歴史を導くもの』と想定されたならかの原理から過去の意味を理解し、現在を位置づけ、また未来に見通しをつけることができるという考え方である。この歴史観は神の存在を想定すると「歴史神学」になる。すなわち「歴史を導く原理」を「神」とし、歴史を「神」による創造から終末への道のり」とする考えである。しかし、このままでは神学的歴史観になる。この何らかの「原理」を断定するのではなく、「仮定」「想定」という考え方、これが哲学的目的論歴史観である。個々の人間が何らかの原理に基づいて目的を持ち全体の歴史を形成するとき、個々の目的と全体の目的が一致しているように働いて歴史は進むという史観である。

(3) ウイルスの目的

さて、今まで「歴史」とは人間が作る歴史のことに限定していた。個々の人間が個別の事情で目的をもって生きている時間経過が人間の歴史全体の目的と一致するという歴史想定である。では人間以外の自然、「生物」においてはどうか。犬や猫、魚や虫がこのような個々の目的をもって生存しているのであらうか。それとも「無目的」「偶然」に生きているのであろうか。「本能的」に生きているのもその本能の命令で動いているのであるから、自分で自由に目標を設定しているのではないから「無目的」というかもしれないが、本能であってもその「目的」は「指示されている」のである。「物か生物」かという究極の議論にある「ウイルス」もその存在に「目的」があるのであらうか。

(4) 存在と目的

生物であれ物であれ、そもそも「存在する」とはどのような「意味」、ここでは「目的」をもつのであろうか。これは古来からの哲学テーマでもある。「なぜ何もないのではなく、何かがあるのか？」は、哲学の一分野である形而上学の領域で議論される有名な問題の一つである。

驚くことに現在、実利的なビジネス界においても同じようなことが起きている。「ティール組織論」である。基本的には、マズローの欲求段階説という「自己実現の欲求」を組織に当てはめた理屈であるが、このティール組織が成り立つ条件のひとつとして、「存在目的」の重要性が語られている。旧来型の組織では、組織の比喩を「機械」と表現したり、もしくは「家族」と表現したりする。一方ティール組織では、組織の比喩表現として「生命体」という言葉が用いられる。組織自身が自らの情熱を持ち、自らが何者かを認識し、自らの方向感覚をもった存在としてとらえるためらしい。それはまさに「生命体」で、組織にも命が宿っているという考え方を示す。そしてティール組織の存在目的とは「組織自身の生きる目的」だといえる。存在目的に耳を傾けるとどういいう効果を得られるのか、存在目的に耳を傾ける慣習によって、経済的利益を最優先するのではなく、社会への貢献を最優先に意思決定ができるようになるだろう。ティール組織では、利益

は空気みたいなものだととらえられている。つまりそれは「目的」ではなく「手段」である。つまり、空気がなければ生きてはいけませんが、呼吸をするために生きていくわけではない。「この組織は何のために生を受けているのか？」の答えに対して、組織と我々で一丸となって向かっていくのだ。存在目的に耳を傾けることで、エゴのためではなく、存在目的を成し遂げるために行動できるようになる。これは個々が全体を考えることによって個々の目標と全体の目標が一致するという考えであり、「存在」自体がその目標を与えているとしている。

このようにビジネスの世界でさえ、抽象的な組織「存在」を生命体として捉え、「手段」よりも「目的」を優先することにより、その「歴史」の継続を維持していこうという考え方が出てきている。このような目的論的組織論には少なからず「哲学の復権」が見られる。どのような存在であれそこには「目的」があるということである。

(5) 文明社会とウイルス

ウイルスは何か別の生命体に寄生することによってのみ生きられる。宿主の存在なしには生存できない病原体である。よって、その宿主が病気を起こし亡くなることは自らの生存のためには不利となる。そのため最終的には、ウイルスは宿主と安定した関係を築いていくことにな

る。これが病原体との「共生説」である。

大規模な麻疹(はしか)の流行は地上から姿を消した。病原体自体が絶滅したのではなく、地球のすべての人が、集団としてのそれと共生できる「免疫」を獲得したからにほかならない。「免疫獲得」とは感染しても「病気」にならない状態のことである。

感染症が社会に定着するためには最低でも数十万規模の人口が必要であるという。数十万という人口規模をもつ社会は、農耕が始まることによって初めて地上に出現した。農耕は定住、野生動物の家畜化、そして食糧の保存という新しい生活様式を生み出し、そしてそれらは感染症のヒト汚染の可能性を広げた。この定住がつくった地域ごとの文明はそれぞれがもつ感染症の闘争として文明とともに淘汰されていった。文明の拡大と「感染症の生物学的障壁」である。感染症は文明の進歩と拡散により他の文明を滅ぼしたり、発展させたりもした。この「文明の歴史」は人間の個々が作る「目的」とウイルスがもつ個々の「目的」が一致していることによる「歴史」は進んでいるということを示している。つまりウイルスも人間もその「目的」は「自己保存」である。自分たちが生き残るためには「人間とウイルス」はお互いの「目的」が違っても「全体」と共生ということを通じて「目的」を共有化してきている。そしてウイルス、人間、自然すべてが「自己

保存」すなわちその「存在自体」を自己目的化しているのが「歴史」であるということ物語っている。

コロナ禍で死と対面せざるを得ない「不条理」の中、私たちは「人生の生きる意味は何か」という「問い」を得た。それが「人生の目的は何か」になった時、同時にコロナウイルスという存在も目的を持つのではないかという疑問が出てきた。互いに自己保存という共通の目的をもつとすると勝つか負けるかの闘争状態になる。しかし、「歴史」の結果を見ると「種」としては滅びているものがあるが「類」としては継続している。「共生」は一つの方法であるが、なにか「生き延びる」キーになるのか。人間の「理性」が生き延びる知恵をあたえてくれるのか。そのような「哲学」とは何か。さらに思考をつづけよう。

大峯奥駈道 (36)

下村嘉明

私は、根っからの調子者でせっかちである。2度あることは3度あると思いつた日曜日にも鴨越駅から宝塚を歩くことにした。歩きだして身体が重い、筋肉疲

労が溜まっているのかと嫌な感じではあったが菊水山を登り始めた。きつい階段を登っていくと太ももやふくろはぎに違和感がある。思うように足が上がらないが、少々無理をしても登らないとアカンと頑張る。

山頂に着き時計を見ると5分ばかり遅れてはいるが、まあまあこんなもんだと納得し、さらに鍋蓋山を目指す。やはり鍋蓋の登りもきつかった。鍋蓋から市ヶ原までは下りなのだが、足の筋肉がパンパンになってきた。これでは摩耶山の登りは苦勞するだろうと思ったが、市ヶ原からリタイアして新神戸へ下るのも情けないと思ひ。とにかく摩耶山を登ることにした。

足が引きつりそうになり漢方薬を飲み歩くと改善しない、どうしてなのかと考へながら歩いていて気付いた。今日は気温が下がっているのだ。夏の服装で来ていたから身体が冷えてきて筋肉も弱ってきているにちがいない。

それでも2時間足らずで摩耶山を登り摩耶山天上寺に向かってしばらく歩いて公衆トイレで用を足し落ち着いて考えた。このまま宝塚へいくとかなり遅くなる。

気温も下がるし日の暮れも早い。今の自分の状態ではリスクが高いから引き返して摩耶山から下りようと考えた。2回目の時はロープウェイを使ったが、また同じように使うのはプライドが許さない。今度は歩いて下りようと思ひ、旧道を使

つて下りるが、この道も幾度か上り下りしていたので概要は分かっていたはずなのだが、パンパンになった足で急な階段や坂道を下るのは非常に疲れた。3度試みて1度だけ歩き通せ、2度は途中でリタイアした結果であったが。私は十分満足していた。自分の身体がケガや病気のまえの状態にほぼ回復したと実感したからである。

2週間後の日曜日、朝起きて天気が良いので六甲山に行くことにした。今度はいつも行っている宝塚からのコースである。大ケガをしてから何度も登っているのだが、毎回途中で引き返していたので、計画通り歩けるか試してみたかったのである。宝塚から塩尾寺までの急坂をゆっくり歩き体力を温存し長丁場に備えた。太平山を越えてもさほどしんどくない。

これなら標高800mの分岐迄行けそうだと思います、休まずに歩き続けた。3時間半ぐらいで目標地点まで登れた。帰りも同じ道をゆっくり下りて宝塚駅に3時間であつた。往復6時間半であつたが、まああのタイムだ。体力の回復に自信が持てた。

余談だが、大平山あたりを登っている時に楽しそうにきれいなフォームで走り下ってきた若い男とすれ違った。すれ違いきざまに顔を見ると、小原将寿だった。

トランラン選手で日本ではトップランナーである。2019のUTMBトランランレースで8位入賞している。振り向いて後ろを

見たらもう彼の姿はなかった。彼だったら、六甲山縦走路を何時間で走るだろうかと想像してワクワクした。

大人の今昔物語(73)

石川 吾郎

今回は、陰陽師で有名な安倍晴明にまつわる逸話です。教科書にでない度は一／五。

安倍晴明、忠行に随つて道を習つたこと

(巻第二四 第十六)

今は昔、天文博士安倍晴明という陰陽師がいた。歴史上の人物に劣らず素晴らしい者であつた。幼いころ賀茂忠行という陰陽師に師事をして、夜昼たがわずこの道を習つたが、少しも不安なところはなかった。

晴明が若い頃、師の忠行がある夜下京あたりに出かけるのにしたがつて、師の車の後を歩いていて。忠行は車の中で寝入ってしまったが、車の前方になんとも恐ろしい姿の鬼たちがこちらへ向かつてやって来るのに気づき、驚いて晴明はいそぎ忠行を起こしてそのことを報告した。忠行は驚いて目を覚まし、鬼たち

が近づいてくるのを見て、陰陽道の術を使い、自分と供の者たちの姿を隠して、無事にやり過ごすことができた。

その後、忠行は晴明をさらに大事にして、この陰陽道を教えること、瓶の中の水をことごとく移し替えるように、晴明完全に教えた。こんなわけで晴明は、この道について、公私ともに重用されるようになった。いった。

師の忠行が亡くなってから、晴明はその邸宅を土御門通りよりは北、西洞院通りよりは東の土地に構えた。その家に晴明がいるときに、一人の老僧が訪ねてきた。十歳を少し過ぎたころの二人の少年の従者を従えていた。晴明はこれを見て「どこから来られましたか」と問うと、僧「自分は播磨の国の人間でござります。

日ごろから陰陽道の法術を学びたいという志をもっておりますが、貴殿はこの道に一方ならず優れておられる由、ぜひとも法術を習いたいと思ひ参つたしだいではござります」という。これを聞いて晴明「この法師はこの道にすでに相当の腕をもっているに違いない。それが自分の腕を試そうとして来たに違いないそんな奴に下手に試されて見くびられるのはいかにも口惜しい。この法師をこっぴどくやつつけてやろう。」と思つた。

「この法師の供の二人の童子は、式神に仕えて来たに違いない。もし式神ならばただちに隠してしまえ」と、晴明、心のうちに念じて、袖の中に二本の手を入れ

て、印を結び、密かに呪文を唱えた。そうしてから法師に答えて「承知いたしました。ただし今日は小生時間がありませんで、今は帰っていただきたい。後に良い日を選んで来ていただきましょう。習いたいとおっしゃることはお教えいたしますよう」と晴明。

法師「ありがたいこと」と、手を合わせてからそそくさと立ち去つて行った。

「もう一二町も行ったころだろう」と思われるときに、法師が引き返してくる。晴明が見るに、しかるべきところに車寄せをしてから、晴明の前に近よつてきて言う。「ここに連れてきていました二人の童子がたちまちのうちに姿を消してしまいました。この二人をお返しください」と。晴明が言う「あなたは珍しいことをおっしゃる。この晴明が何のために他人のお供の童子を取ろうとするのですか」法師「あなたさま、まったくもつてその通りでございます。お許しください」と詫びをいれる。その時に晴明が言うに「よし。貴殿が人を試そうと式神をつかつてこられたのが腑に落ちぬこと。この晴明を相手にして、このように他人を試みようとしないのが身のためですぞ」と言つて、袖に手を入れて、何か呪文を唱えると、やがて外の方から例の童子が二人そろつて走つて法師の前に出てきた。

このとき法師「まことに、優れたお方だとお聞きして、試みてやろうと思ひ、参つたしだい。これに式神を使うことには

手馴れております。人の仕えているのを隠すことは、とても出来ることではございません」といい、たちまち名符(自分の素性の名札)を書いて、清明に渡した。

また、この清明、あるとき広沢の寛朝僧正という人の僧房を訪ねて、話をしているとき、居合わせた若い貴族や僧などが清明に世間話で「貴殿は式神を使われるそうですね。一瞬のうちに人を殺すこともおできになるのですか」と。清明「この道の重大事をずいぶん、遠慮なくいろいろお聞きになるのですね」と。「そう簡単には殺すことはできません。ですが少し力を入れれば、必ず殺すことはできません。虫なんかは、ちよつとのことをすれば必ず殺すことはできません。ただ、また生かす方法を知っていなければ、殺生の罪を得ますので無益なこと」という。そんなとき、庭からカエルが五六匹ばかり出てきて、ぴよんぴよん池のほとりに行くのを見て、若い貴族たちは、「じゃああれを試しに殺してみてください」という。清明「罪作りな方々だ。とはいえ私を試そうとするのであれば」と、草の葉を摘み取って、物を読むようにしてカエルの方に投げやると、その葉がカエルの上に乗ったと見えると、たちまち、カエルはその下でひしゃげて死んでしまった。僧たちはこれを見て、顔色を変えて怖がった。

この清明は、自分の邸宅の中で、他人のいないときには、式神を使っていたのだろうか。人もいないのに、葎(しとみ)を上げたり下げたりするようなことがあった。また門を閉ざすのに、人もいないのに自動的に閉めることができた。した。このように、稀有のことが多かったという。

清明の子孫は、今に至るまで、朝廷にお仕えし、高い位を維持した。この土御門の邸宅も代々この場所にあった。その孫は最近まで式神の声などは聞いたのだと。

というわけで、清明という人物はただ者ではないと、語り伝えられていることだ。

《コメント》

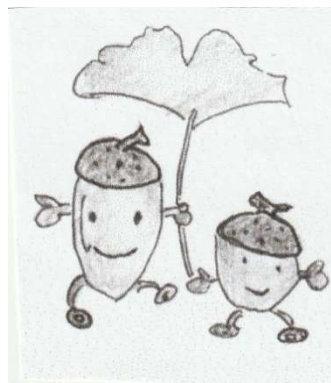
ここでは、安倍清明についての伝説的なエピソードを紹介しています。

京都には安倍清明を祀る清明神社があります。京都人にとってこの神社は、生まれてくる子供の名前を付ける際に頼りになる存在として有名です。清明神社は五芒星をシンボルにして、最近の陰陽師ブーム以来、観光客には有名なスポットになっています。

この神社は、堀川通り一条を少し下がった西がわにあり、この場所はこの話に出てくる「土御門通りよりは北、西洞院通りよりは東の土地」に相当して、清明の旧宅が清明神社になっていることがわ

かります。境内には「今昔物語」のこの話がパネルで紹介するパネルが展示されています。またこの神社の近くにある、妖怪の出現で有名な一条戻り橋の旧来の石橋が再現してあります。この一条戻り橋は、都と冥界の境界と考えられて、数々の伝説が伝えられています。

なおここに登場する式神(しきがみ)とは陰陽師が操る鬼神のことで、安倍清明は家来として「十二天将」を従えていたそうです。このうち六人が吉将、六人が凶将とされていたということ。しかし考えると、神と名前がついていても式神とは要するに清明の使い走り、今だったら単にリモコン並みだった、ともいえそうです。



新型コロナウイルス禍愚考(その7)

明石 幸次郎

パンデミックなどが起きた時、生き延びるための重要なこととして、まず、健康という個人の資質、それと、家族、友人、地域の人達との絆。絆が弱い人は、

感染拡大によって、更に弱体化すると言われていきます。

頼れる誰か、頼ってくる誰かが人には必要で、それは、家族だけではなく、地域などの人達で、今回の様な、感染症の拡大、災害時などでは、それらのコミュニティの強化の重要性が弱者を救う為の教訓として上げられています。

人は、人との繋がりの中で、困難や逆境にあっても心がおれず、柔軟に生き延びる力を持つものであるとの事です。

さて、超高齢化社会においては、我々のような高齢者の一人暮らし(独居)が増えています。男性は女性よりも孤独に弱い生き物のようです。特に高齢者の独居になると、自活する習慣、技を持たない男性は、この様な自粛下の中で巣ごもりが続くと、生きる気力無くし、アルコール中毒になるとか、果ては自死に到るケースが増えているようです。

なぜ、孤独に弱い男性が自ら、孤独を深めてしまうのか? 我々の時代は、女性に比べ男性の多くは特に会社、役所などの組織に属し糧を得ていたため、そこで生き残るためには、自分の弱みを出さないことを習慣化して、黙って耐える事に自分を慣らしてしまうことが多くあったと思います。特に有名大卒となると、プライドが高い故に、周りを気にして自分の弱みを隠し、自分の中の常に期待されるエリートとして、振舞おうとした結果、他者評価と自己評価のギャップに悩

む者が私の周りにも何人いました。彼らはその精神的バランスを取る為に、反動として家庭では「さだまさしの歌？」のように、亭主閑白を演じて精神的なバランスを取っていた様です。

男性も現役で糧を稼いでくる時期は、まだ、奥さん、家族の忍耐と寛容に支えられていて、幸運で良かったが、組織に属していたら、仮に幾ら出世したと言えども定年退職はあります。

そうなたら、それまでは、奥さん家族は、自分の世界、他者との人間関係を築いているので、いつも家に居て、現役に時のように亭主閑白的な振る舞いをしていて父親は当然、敬遠されます。

特に、奥さんが絶望的になるのは、いつまで、この伴侶の食事、洗濯、家事を自分がしないといけないのか？ ということのようにあります。

中・高年の離婚が増えているもの、奥さんのこの世話をする忍耐力が続かないということにもあるようです。

前回にも書いたような、家で何もしない男性は定年になった時の離婚予備群であるかも知れないし、定年後、本人自身も食事を含む家事が何も出来ないということ、もし、一人になれば、自活が出来ないという孤独と不幸に繋がります。

さて、ボランティアの電話相談も高齢者の独居の方の電話も多いですが、圧倒的に女性からのが多く、女性はしんどい、つらい、悲しい、寂しい、苦しいといっ

たことの「心の重荷」を口に出すことが慣れているのか、それを電話で話すことにも抵抗がないようです。

あちらこちらの「いのちの電話」に掛けて、自分のしんどさを電話で吐き出して、少しでも気持ちを軽くして明日の生きる力とされているようです。

それに比べ、高齢者の男性の電話は少ないです。これも、人に自分の寂しい気持ち、苦しい病氣、経済的に困って、死にたいというのは、プライドがあるから他人に言えない、まして、電話でアカの他人に言ったところで何にもならないのでは、と思っておられるのでしょうか。

ここでも、男女の違いが現れています。が、男性の知能は女性と比べ解決脳が強く、自分の苦しみと話したところで、何の解決に繋がらないやないか！ と想う脳？ が働くのだと思います。それに比べ、女性は共感的脳が強く、話すことで、相手に共感してもらおう事で、何も解決しなくても、少しは「心の重荷」が軽くなるように脳が出来ているようです。

女性をよく観察してみると、知らない女性に対しても、話しかけ、直ぐに世間話をしますが、男性はまず、それはないですね。

何気なく話が出来き、お互い共感し合えるという能力は女性の方が高いですね。話すことで、孤独にも耐えられるのでしょうか。

さて、色々な苦しい話、しんどい話を

電話で長く聴いていますと、終わった後は、自分の中にそのしんどさが乗り移り「心の重荷」を抱えて、家路につきますが、家で愚妻にこの重荷を少し話すと「そんな、しんどいボランティアは身体にも良くないし、時間とお金の無駄と違う？ それに何よりも電車で、人の多い所に行くだけでもコロナ感染リスクが高くなるので、止めたら？」と言われるのが常です。

その心のバランスを取るために、時々、永年の友人をわざわざ最寄の駅まで出て来てもらい、酒を酌み交わしながら、雑談の中で、少しは自分の溜まった「心の重荷」を、この友人に聴いてもらうことで、少しは軽くなって、又、明日は続けようという気持ちになっています。

この友人と、その他聴いてもらえる人のお陰で、このしんどいボランティアも6年目に入っています。感謝！

オクラの山たより (50)

困了生

一

JR嵯峨野線の丹波口駅で下車して駅の東を南北に走る千本通りを南下するとすぐにかつての遊里島原に到着します。もちろんそこに行ってみても角屋(揚屋であつた。今は「角屋もてなしの文化美術

館」として公開されている)、輪違屋(置屋であつた。日本で唯一大夫をかかえる店でも諸芸百般に通じた大夫が、観光向けであるが、数人いる)や島原大門などは今も残っていて往年の風情が少しばかりはあるのですが、日本最高位といわれた傾城町のにぎやかさはもはやありません。幕末に新撰組の局長の近藤勇が足繁く通つたというかつての姿はまぶたを閉じて想像するほかはないのです。

今日の遊里島原は江戸の吉原、大阪の新町と並んで幕府公認の遊郭でした。江戸時代にあつてこの三大都市に公認の遊郭が設けられたについては面白い説があり紹介すると、一言でいえば男性があふれかえっている都市であつたことです。

江戸は参勤交代で全国から多くの武士たちが単身で押し寄せました。同じように大阪には蔵屋敷、京には京屋敷と各藩の武士たちが詰めている藩邸がありました。江戸・大阪・京にはいずれも物流や商業で多くのその関係者たちが全国からやって来ていました。そこから考えると江戸時代の江戸・大阪・京はいずれも男女比のバランスがいちじるしく崩れた都市でした。だから、必要悪で公認というと女性史の研究者から叱られそうですが、どうでしょうか。

話をもとにもどして島原です。島原は一六四一(寛永十八)年に六条三筋町から京西南の片端にある西新屋敷の地に移って誕生しました。そのころこの一帯は

朱雀野と呼ばれ四方どこを見ても田畑しかない地でした。その一面に塀をめぐらして田野に囲まれた廓としたのです。ここに来るためには丹波口から田んぼの畦（あぜ）のような道をたどらねばなりませんでした。蕪村の門人であり三葉社にも参加していた黒柳召波に

島原に 田舎の空や 夕ひばり

という句があります。この句のとおり島原は京の僻陬の地、京の田舎ともいふべき地だったのです。

吉原もそうですが遊郭の周辺がヒバリ鳴く田園地帯であったことは今から考えると不思議に思えます。しかし明治中期になってもそうであったらしく高浜虚子が壬生狂言を見物した帰りに田んぼの畦道にすわって島原の大夫道中を見たという記録があります。

島原の名称については諸説ありますが、廓のありさまが先年、乱が起こった肥前国島原の城構えと似ていたとして世の人が称するようになったという説があります。また一説には周囲が田畑であり堀や堀で囲まれている様子が島のようにあったことから称されるようになったといえます。田んぼに囲まれた中に浮かび上がるようにある不夜城。それが島原のイメージです。

名称の由来はともかく元禄年間には揚屋、茶屋ともに二十余軒が存在し遊女の

数は三百人ほどいたとされています。江戸の吉原は周囲が幅九メートルの堀（お歯黒どぶ」といわれた）とその内側に高い塀がめぐらしてあり出入口も一カ所だけであった（島原には東西に二つの門があった）ため嚴重に閉鎖された空間といってもよいのですが、島原はかなり開放的であり一般の人も男女を問わず自由に行き来できました。また、島原の内部

には一般の人が居住する空間もありました。さらには廓の遊女たちも通行手形さえあれば自由に外部に出ることができ、男性だけでなく女性も料理屋でもあった揚屋にあがることができ十分に楽しめたようです。たとえば新撰組の原型を創った清河八郎や幕末の漢詩人頼山陽が実母を「親孝行」として揚屋で遊ばせた例もあります。その島原の開放的な雰囲気はこの地で発生した火災が二百五十年の間に数えるほどであったのに対して、完全に閉ざされた空間であった吉原では明和年間から慶応年間までの百年間に十八回もの大火が起きていることからも分かります。吉原の火災の原因は辛い毎日に耐えきれなくなつた遊女たちによる放火がほとんどでした。吉原の近く南千住にあった俗称「投げ込み寺（正しくは浄閑寺）」は死んだ遊女（その原因は病氣、自殺、逃亡失敗による拷問死など）の死体が投げ込まれた寺として有名ですが、その寺の過去帳によればここで弔われた遊女たちの平均寿命は二十二・七歳。五、六年

に一度の遊女たちの吉原の放火もなるほどと納得できます。なお、江戸の法にてらせば放火は大罪で火あぶりの刑となるのですが、放火をした遊女のほとんどが情状酌量されて島流しとなったとか。オ二の目にも涙でしようか。

二

先ほど日本最高位の傾城町島原と書きましたが、いうまでもなくこの町にも栄枯盛衰はありました。江戸時代に限つていえば「京の田舎」といってもよい西はずれの地。格式の高さを誇れても足場では断然に祇園や先斗町が有利で、これが大きな島原のハンディでした。そのため江戸中期にはかなりすたれた状態になっていたようです。それを今に伝えるのは江戸の読本作者滝沢馬琴。一八〇二（享和二年）、京見物にやって来た彼は島原を訪れ

島原の廓、今は大いに衰へて、（揚屋町以外）家も巷も甚だきたなし

『羈旅漫録』

と、現状を誠に手厳しく記しています。余談になりますが、この馬琴の「羈旅漫録」には島原だけではなく京の遊里について興味深い記述もありますので紹介します。

京にて島原のほか、御免の（公許され

た遊女町は、五条坂、北野、内野なり。五条坂はあこや坂と称す。また、近年免許ありしは祇園、同新地、二条新地、七条河原なり。その外、西石垣、（以下三十六カ所の私窠（かくしはいじよ）非公認で性を売る女性たちがいる場所のこと）江戸では非公認で性を売る女たちを隠売女（かくしはいじよ）といったが紹介されているが、（省略）：およそ落中の半ばは皆妓楼なり。京の節儉なる人気にて、かく多き遊びのそれぞれに世渡りすること、第一の不思議なり。客は春、他国の人三分の二、地の人三分の一なり。秋より冬のうちは、地の人三分の二、旅人三分の一なりといふ。故に秋冬はさみさみし。

京の人はケチンボだというけれども、遊女屋を営む者が多いのは不思議だといって、そのナゾを自ら解いてみせています。理由は簡単。他国からやって来る男たちの存在でした。「京の美女と遊べるぞ」と全国から京の遊女めがけてやって来る男たち。愉快な図ではありませんが、この時代の真実なのです。

「他国の男たち」といえば、創作上の人物ではありますが、馬琴と同時代に京にやって来た江戸の男二人、今も三条大橋の袂に像がある弥次郎兵衛さんと喜多八さんがいます。この二人が最初に泊つた京の宿は五条橋下でした。ここには一七六一（宝暦十一）年以来、茶屋の株が

貸与され遊郭の町となっていました。二人はさっそく遊ぼうと揚げ代（遊女と遊ぶ代金）が一晚一人銀七匁のところ「上方のおやま（遊女）は値切つて遊ぶのが常識だ」といつて四百文（銀四匁）、つまり二人で銀八匁（現在の一万円ほど）にさせます。すぐに二人の遊女が来て次々と飲食物も出て来ます。安い値段で飲み食いもこんなにできて得をした。京は人柄が悪いと聞いていたけれどもサービスがいいじゃないかと二人が喜んでいて勘定を取りに別の女がやって来ます。見れば揚げ代・飲食代・雑費あわせて二人で合計銀十六匁三分（現代の二万二千元ほど）の請求。しかも雑費にはロウソク代銀五分（現代の七百円ほど）まで細かく勘定にいれられています。二人はエエーッということとあいました。しかも夜が明けてみれば喜多人は遊女に着ている物をゴソリと盗まれていたという始末。裸の喜多人は弥次郎兵衛の合羽を借りてこの店から出るのですが、そこで弥次郎兵衛の狂歌一首。

うとましや かいたる恥も 赤はだか
合羽づかしき 身とはなりたれ

「合羽づかしき」は「こっぱずかしい（小恥ずかしい）」の地口です。これでもまったく懲りない二人は後に壬生寺（島原の一キロほど北にある）の門前でも泊つて遊んでいます。ここは「葭簀（よしず）、

門先に立て寄せたる、あやしの店」でおそらく私算（かくしばいじよ）であつたと考えられます。もちろん払つた揚げ代は五条下よりもぐんと安かつたはずで、この「東海道中膝栗毛」に書かれているように江戸の町人であつた弥次・喜多が京の島原で大夫相手に遊ぶなどは考えもつかないことでした。そんなことをすれば揚げ代だけでも銀七十六匁であり、お

離子方等の代金・飲食費・雑費などいれると銀二百匁（現代の三十万円ほど）近くになつたかもしれせん。ただし、島原の揚屋は今の京にも多く残る。「一見さんお断り」です。大夫にお相手をしてもらうためにはなじみのお客さんのつてを頼つて三、四日は通いつめねばなりませんので現代の百万円近くの散財を覚悟しなければならなかつたでしょう。江戸の夜鷹が二十四文（現代の四百円ほど）であつたのに比して何と違う、と義憤すら感じます。

三

さて、われらが蕪村です。もちろん彼も島原と関わりを持ちました。それもかなり深くであつたことは後で述べますが、その蕪村に次の句があります。

寒垢離や 上の町まで 来たりけり

「寒垢離」は「愛宕（あたご おろし）」が吹きすさぶ酷寒の時期に行われる荒行で

す。京では白頭巾で頭を包み白衣の装束で町に出て、家々を回つて銭を乞いながら家の前で水を浴びる行者群の姿が見られました。彼らは阿呆陀羅経で有名な鞍馬山の大神院に属する願人坊主とされ、彼らの行動範囲は京全体に及んでいました。彼らのために京の家ごとの戸口には彼らがかぶるための水が用意されていたといひますから、京の町中で協力していたといひつていいでしょう。「上の町」は島原の東の入り口である大門をくぐつてすぐのところにある地名。句意は単純で寒中の行者が島原の一角にやつて来た、ということだけのことです。もつとも「上の町まで」という語にこだわれば洛北の鞍馬から遠く何とまあ島原まで場違いな願人坊主が無粋なことにやつてきた、と蕪村の真意をみることでできそうです。

しかし、これにはもう少し検討が必要です。まず島原が吉原と同じく周囲を囲まれた曲輪（くるわ）であつたが、先ほど述べたようにずいぶんと違いがありました。馬琴も述べていますが、確かに堀や壁などに破損は多くあつたらしいのですが、修繕はなおざりであつたらしいのです。このユルい感覚は遊女の管理も同じで大夫たちも洛内外の風物の見物にもよく出かけていたらしいのです。もちろん、島原は堀の外からは閉じられた空間でしたので、それなりの自立した営みが必要でした。京都東町奉行の与力でもあつた神沢杜口は随筆「翁草」で書いてい

ます。

京の島原こそ住みよかるべき所な

れ。四壁の外は郊野にして、日吉（ひえ）・愛宕・八幡・山崎・西山・東山・北山・伏見のながめ、くまなく見えわたりて、景色の地なり。

杜口は島原の見晴らしの素晴らしさを絶賛しています。揚屋の二階から見渡した風景ですが、意地悪く言えば周囲は田野ですから眺望をさえぎる物は何もありません。そして馬琴と同じく荒れ果つた屋敷が多いことを述べた後、

日々の費用その外の用具も廊中にそれぞれ商家ありて何事も足れり。

と、廊内で生活用品がすべてまかなえるといひています。そして、さらに次のようにも言っています。

遊君の行き来しげく目を悦ばしめ、
しかも、その地閑寂なり。なべてこの人、花洛のひすかしき風俗にかはりて、人、直（すなお）なり。

「ひすかし」とは心のねじくれているさまをいう語です。京の人は底意地が悪い、心がねじくれているのが京東町奉行の幹部がいつているのはおもしろいですが、それに比べ島原の人たちは「直」だとい

うのです。そういう土地柄にひかれて多くの文化人が島原に住みついでいます。蕪村がお互いに切磋琢磨し合った盟友であった俳人炭太祇もその一人でした。当然のことながら風流人だけでなく一般のひととも老若何女問わずやってきて大賑わいを見せることもしばしばでした。

そこで「寒垢離や上の町まで来たりけり」です。人の出入りが我々の想像以上にあつた島原のこと、「寒垢離」がやって来ても何の違和感もありません。むしろ鞍馬からよくぞここまでと感嘆し冬の京の風物詩ともいえる「寒垢離」の経を唱える声に冬を味わっているといつてもよいと思えます。島原の町一帯に朗々と響く寒垢離の声。その声にしんと冷えて込む京の冬を心の中で思い描いていたことでしょう。

角屋の主人中川徳右衛門は俳号徳門、その子の俳号徳野と俳諧を通じて蕪村とは親しい関係にありました。角屋だけではありません。三文字屋治兵衛、かたばみや弥三郎、橘屋吉右衛門、西川屋徳兵衛、藤屋新七と多くの揚屋、遊女屋の主人が発句を吟じていました。蕪村が起きたころの島原には大変な俳諧ブームが起きていたのです。ですからたぶんですが、蕪村は角屋の二階で、そこでは句会が行われていたのでしょうか、冬の到来を告げる寒垢離の声を聞いたと想像することができます。

なお角屋の建物は島原が開かれて以来現存する唯一の揚屋の遺構として国の重要文化財に指定されています。ですから蕪村もすわり、近藤勇もすわつたに違いない座敷もまだ現存しています。また角屋に蔵されている蕪村の作品中「紅白梅凶屏風」も重要文化財に指定されています。他にも蕪村が描いた「武陵桃源図」「春夜宴桃李園図」「呉山雪図」など優れた作品が多くあります。

四

島原と蕪村の関係を示す書簡を一つ紹介します。年代はよく分からないのですが、角屋で保存されていた春道（具体的に誰なのか不明。おそらく一時的にふざけて呼んだ名前か）に宛てた手紙です。

桃源の気質お尋ね、さてさて仰せと
相違にて候。ことに吞獅はその里の一人にて、長者町の大福長者も風流及びがたく、貴子へいつわり言ふべう人候や。

梅に鳥 吹き矢のぬしを 恨むなり
夕方、角屋へ申すべく候。玉句もつともに承り候。

蛙飛込む 打ち掛けの裾
御一笑くださるべく候。以上。

二月廿三日

蕪村

西国第一粹人 春道 様

「桃源」は「島原」を音読して洒落たも

の。「吞獅」は島原の置屋の主人桔梗屋治助の俳号。桔梗屋は蕪村と関わりが深く蕪村の絵をたくさん手に入れて大もうけをしたと皮肉屋の上田秋成からからかわれた人物。もともと炭太祇の門人であった桔梗屋治助は島原俳壇の第一人者と自負していました。「長者町の大福長者」は洛中の最も富裕な人が住む地で最も富裕な人の意ですが具体的に誰かは不明です。「貴子」は「あなた」、「玉句」は「あなたの句」の意です。

手紙の内容は風流人である「吞獅」を誹謗する者への反論となっており、「梅に鳥 吹き矢のぬしを 恨むなり」とは梅にウグイスという絶好の風景に吹き矢を放つてウグイスを落とそうとする無粋な者を恨む、という句意で「吞獅」を誹謗する者への蕪村の非難となっています。「蛙飛込む 打ち掛けの裾」は春道の句への付け句。春道の句がどのようなものであったかは不明ですが、蕪村の付け句は芭蕉の「古池や蛙飛込む水の音」を連想させて面白いです。まさに「御一笑」の作ですが、蕪村はこうした「笑い」でみんなをなごませることが好きであったようです。

この春道への手紙からも蕪村と島原の人々とのつながりが強かったことがわかりますが、つながりの強さを示す例をも一つ。角屋には巨大なアワビ貝に金泥を施した酒杯に添えられた冊子が「うき巢帖」と題されて今に伝わっています。

その冒頭に蕪村自筆の「序」が置かれています。内容は浦島が竜宮城から持ち帰った杯を「浮瀬（うかぶせ）」というのに対して俵藤太が乙姫からもらった鳩の海（におのうみ 琵琶湖のこと）の宝物がこの酒杯だと述べています。鳩の海につきものは鳩鳥（におどり 「かいつぶり」のこと）。鳩鳥は水面に巢を作り、それを浮き巢といひます。これにちなんで角屋名物の酒杯を「うき巢」と命名したという次第。次に示すのはその文章の終わりの部分です。

（俵藤太が乙姫からもらった酒杯は）
伝えて今徳野（とくや）が家に蔵（おさ）む。予に其の銘を乞ふ。予おもふ。浦島子は与謝の海に得たるをもつて「うかぶ瀬」といふ。藤太は鳩のうみにこれを得たり。それ、「うき巢」と呼ばんか。一盃一盃また一盃。長く子が家に伝えて、知らず幾万盃ぞ。

醉蕪村漫書

「徳野」は角屋の主人中川徳右衛門のこと。「浦島子」の「子」は「氏」または「さん」の意。「一盃一盃また一盃」は李白の漢詩「山中対酌」の一節。末尾の署名からしても酔顔の蕪村が半ばふざけ半分書いた序文ではないでしょうか。酒杯にことよせて角屋の末久しい繁栄をこっとほいだわけです。絵の上得意でもあつた角屋と蕪村のなごやかなつながりが想像

できます。

【補足】

1 「太夫」と「花魁」

島原では最高位の遊女を「太夫（大夫とも書く）」といいましたが、吉原では「花魁（おいらん）」といいました。京の島原には吉野太夫、吉原には高尾太夫、大阪の新町には夕霧太夫がいて何代にもわたってその名が伝えられました。太夫は単に美人というだけではなく書画、生け花、音楽、短歌・俳句といった文芸、その他さまざまな分野のことに精通していなくてはなりませんでした。その伝統が島原ではずっと守られ今の大夫（もちろん観光用です）にも受け継がれていますが、吉原ではすたれ十八世紀中頃には「花魁」という名称に変わりました。島原が高尚で伝統的な文化のセンターのような雰囲気を持ち続けたのに対して吉原が遊興のセンターと化して新しいフアッション、新しい流行の発信基地のようになっていったのと軌を一にしているのかもしれない。

2 頼山陽の親孝行

本文中で頼山陽が実母を島原の揚屋に連れて行って親孝行をしたと書きましたが、もう少し詳しく書いてみます。

一八一九（文政二）年三月のこと。頼山陽は母とともに故郷の広島から上方へ

とやって来ました。一時、大阪に母を残し京に入り、しばらくして母を京に迎えると奈良・吉野・琵琶湖をはじめとして畿内各地の名所見物へと母とともに出かけられています。

三月二十一日には島原の揚屋で母をともなつていつときの遊樂を楽しみました。まず廓内を大夫が道中するのを見て、そののち「三文字屋」という揚屋にあらまりました。この「三文字屋」は蕪村と句会を行った三文字屋治兵衛の店です。もちろん蕪村死後三十年はたつていますから店の主人は代替りしていたことでしょう。この揚屋で酒や弁当をいただくうちに夕暮れとなり、燭台がともされ大夫を呼ぶことになりました。その数はなんと十人。母の梅颯（ばいし）の日記に「気高くゑん（艶）に見ゆる」と、感激の様子を記してあります。大満足です。大夫だけではなく芸妓や舞妓までも呼んだらしいのですが、本当に贅を尽くした歓待ぶりでした。

二条木屋町にあった山陽の家までは籠を使いました。母親の日記には紋日（もんび）という遊郭では特別な日であったので片道であったのに往復分の籠代をとられたということまでも書きとどめてあります。

一介の町の儒者にすぎなかった山陽にとって、かなりの出費を強いたに違いないのですが、できうる限りのもてなしをしようとしたのでしょう。幕末最も評判

の高かった漢詩人といってよい頼山陽から見ても島原は親孝行を尽くすには最高の地であったのです。そこは金銭欲と色欲にかられた男たちだけが楽しむための場所では決してなかったのです。

最後に一言。吉原との比較でつい島原を持ち上げすぎましたが、島原が主に経済的な理由で集められた多くの遊女をかかえた「廓」であることはいうまでもありません。また本文中にもあったように京には島原を筆頭に多くの遊里が存在し、性売買の業をいとなむ女性が多数いました。その実態も含めて日常における男女の性の営みと権力との関係の研究はまだ始まったばかりという状態です。この分野で興味のある方へ次の二冊を参考のために紹介します。よければ御一読を。

- ① 「性から読む江戸時代」
沢山美果子 岩波新書 2020年
- ② 「娼婦と近世社会」
曾根ひろみ 吉川弘文館 2003年

隠された歴史（25）

満田正賢

今回は隠された歴史の具体的な考察から離れて、記紀の基礎的研究の話を戻ります。「隠された歴史（1）」では、森博達氏の「古代の音韻と日本書紀の成立」と谷川清隆氏の「日本書紀研究の一試案」の内容をご紹介しました。今回は、小島憲之氏の「上代日本文学と中国文学」（塙書房・昭和三七年刊行）の内容を参考に、して記紀を研究してみたいと思います。

私は大阪大学図書館で「上代日本文学と中国文学」を読み始めていたのですが、コロナの影響で読み進めなくなっていました。そこで一念発起して古書店ネットを通じて「上代日本文学と中国文学上・中・下」三巻を購入して腰を据えて勉強してみることになりました。「上代日本文学と中国文学」の上巻は古事記・日本書紀・風土記、中巻は万葉集、下巻は懐風藻その他の散文について、それぞれと漢籍との関係を説明しています。

小島氏は、小学館版日本書紀の編者ですが、岩波版日本書紀においても、特に漢籍からの引用箇所を指摘する注釈には「上代日本文学と中国文学」の内容が多く用いられています。小島氏は記紀の基礎的研究の第一人者と言えます。小島氏は古事記、日本書紀の原文の比較、そして数多の漢籍の記述との比較を、丁寧



そして膨大な知識量を駆使して行っています。従って本来ならば、小島氏の、原文を比較した具体的な説明を、ご紹介しなければ意味を成さないのですが、今回は紙面が限られている為、小島氏の研究の結論的部分とそれに対する私なりの考察を、ご紹介させていただきます。

さて、小島氏は古事記と日本書紀の成り立ち、及びその特徴を次のように表現しています。

『古事記』においては「原古事記」原資料群」の本文をなるべくやさしくそのまま読めるように仮名書にし、日本書紀ではこれを漢文的にしたものではないかと思われる。「原古事記」原資料群」の本文は、むしろこの日本書紀のそれ（但し日本書紀全巻を指すのではない）に近いものではなかったか。しかも日本書紀よりもやさしい文字を使用していたことは、日本書紀の潤色の濃度に照らして推定出来る』

『日本書紀の訓注と古事記の本文と一致するものが甚だ多い』

『記紀各々の会話文もそれぞれの地の文の文体に従っていることがわかる。記は本文の如く、仏典的口承的物語的である。これに対して、紀は、漢文的、特に会話が漢籍のことはをそのまま潤色したような点が少なくない。』

小島氏は古事記・日本書紀共通のベースとなった「原古事記（原資料群）」という存在を想定しています。そしてそれは

日本書紀の中で漢籍による潤色のほとんどない巻に近かったのではないかと推定しています。この巻は後述しますが、森博達氏が発見した⁸群にあたる巻にほぼ該当し、倭習（和臭）と呼ばれる日本固有の仮名遣いで表記された歌謡が含まれています。

倭習（和臭）については、古田史学の会の服部静尚氏より、貴重な示唆をいただきました。『倭国（日本）には、中国より漢字という文字文化が伝わったが、吉野ヶ里その他九州・近畿の各地で最近弥生時代の硯が発見されており、文字の伝来は紀元前まで遡る可能性がある。そしてそれが日本独自の仮名遣いである倭習（和臭）を生み出す為には、一定期間の中国文化との断絶が必要であった。それはおそらく倭の五王の最後の朝貢（五〇二年の倭王武の梁への朝貢）から六〇〇年の遣隋使までの期間にあたるのではないか。倭習（和臭）というのは日本独自の文字文化の創設という先進的な意味合いをもっている』という示唆です。そしてその新しい文字文化は倭の五王時代から後期九州王朝に引き継がれ、中心地であった筑紫で開花したものと想定されます。つまり、「原古事記」原資料群」は九州で作られた可能性をもつということになります。

次に古事記に関する小島氏の考察を検討します。

『古事記の文章は、その性格上、全体を流れる口承的な匂い即ち口承時代より受け継いだ伝承の痕跡を残すと共に、他方において漢訳仏典の文体を学んだ部分があることが知られる。』

小島氏は古事記が用いていた漢訳仏典の文体をこう説明しています。

『接続詞「故」には二つの型がある。第一類は「故（ナルユエニ）、——」という型である。第二類は「故（ユエニ）——」という型である。第一類は和文型とも呼ぶ。或は「仏典型」、『仏典体』とも呼ぶ。正統的な漢文に於てみられる『故』は第二類『——故——』型が一般である。』

小島氏が指摘する「第二類」漢文型」というのは、文脈を短く切る文体で、現代でも書類の文章はだらだらと長く続けるのを避けています。一方、「故（ナルユエニ）、——」を代表例として、「第一類」和文型・「仏典型」は、話の前後を結びつけて、だからだと話を続ける文体で、現代でも皆さんの会話をそのまま文章にしてみると冗長的な感じになります。お経も同様で、話が連携を持ちながらだらだらと長く続く特徴をもっています。

小島氏は、古事記の句読法に関して代表的なものとして本居宣長の古事記伝（古訓本）と田中本（田中頼庸校訂の「校訂古事記」）をあげています。田中本はなるべく第二類の漢文的により、宣長は第一類の和文的によりなっていると述べています。そして古事記の文体を説明する為にチェ

ンバレンの英訳本「古事記」を使っています。

『古事記の文章の「印象」をさぐる便宜上（中略）古事記の原文に盲目的に忠実なこの英訳文が、普通一般の英語の文章とは違ったものであることに気付く。即ち thereupon → 「於是」、so → 「故」、thereupon → 「故於是」、then so → 「爾」、so then → 「故爾」、forthwith → 「乃・則」、then forthwith → 「爾即」for this reason, therefore → 「是以」などの接続のことが訳文全体にわたって重要な役割を努める。（中略）忠実な直訳風のこの訳文が単調生硬であることはそのまま古事記の文章の文体に係する』このような考察によって、小島氏は古事記の文体を総体として第一類「和文型・仏典体」と見做します。この「漢訳仏典」の文体について、小島氏は以下のように説明しています。

『漢訳仏典は、六朝時代の駢儷（べんれい）体を乱して、中国文学に新しい分野を開いた仏教経典であり、所謂仏教的翻訳文学である。この新文体の生まれた一つの原因は、印度仏教文学（仏典）をスタイルのちがう中国文に翻訳したためである。』

『その翻訳法の重点は、経典の内容をわかりやすくし、飾りを少なくすることであった。訳経は遠く漢代に遡るが、四世紀末より五世紀の初頭にかけての最も優れた訳経者は鳩摩羅什である。』

『古事記が天武朝の邦家の経緯、王化の鴻基を示そうとし、しかも古い伝承を諸家に正しく伝えるためには、あたかも仏典が仏教の寓意的な教義や大衆に理解し易い諸語を宣伝する如く、その理解について最も便利な文体によることが必要であった。これを耳で理解させるためには、口頭法（口語）的なものの方が、漢文的（文言的）なものよりもよい。』

『印度の仏典は中国に入って漢訳され、仏教的文学となり、中国人に欠けていた想像力を与えた。これはわが上代人に於いても同様であったと思われる。仏典には味のある寓話もあり、伝奇的なものにも富み、天智震動、奇跡の出現も到る所にみえ、彼等を十分に空想の世界に遊ばせたものと云える。』

古事記が「漢訳仏典」の文体で書かれている理由は、稗田阿礼が習誦した古事記の台本（「原古事記」ではなく、それを「漢訳仏典」の文体でまとめた史書の台本）の編者が学んだ文字が經典によって日本にもたらされたという理由によるものだと思います。私が推定しているように古事記が蘇我馬子の編纂した「天皇記」「国記」「臣連等の本記」のリメイク版だと考えると、仏教導入の息吹の中で古事記の台本が作られたという時代背景が浮かびます。

次に日本書紀に関する小島氏の考察をご紹介します。まず、次の例を見て下さ

い。小島氏が漢籍の潤色として取り上げている例です。

『行屠城父，羽夜聞漢軍四面皆楚歌，知盡得楚地，羽與數百騎走，是以兵大敗。灌嬰追斬羽東城。楚地悉定，獨魯不下。』——漢書高帝紀

『行屠傍郡。新羅王、夜聞官軍四面鼓聲、知盡得喙地、與數百騎亂走。是以、大敗。小弓宿禰、追斬敵將陣中。喙地悉定、遺衆不下。』——雄略紀

漢書の記述は項羽が敗北した有名な四面楚歌の記述ですが、これが雄略紀九年三月に紀小弓が新羅を包圍した記事の下敷きになっていることがわかります。

さて、日本書紀の編纂に際して参考にした漢籍について、小島氏は以下のように解析しています。

『日本書紀が実地に利用した史書即ち潤色に際して用いた史書は次の如くなる。』

△史記○漢書○後漢書○三國志（魏志・吳志）○梁書○隋書』

『日本書紀が潤色に用いた漢籍引用書類は、一説に依れば周易以下八十種以上にも及ぶ。しかし殆どの大部分は「間接」の引用であり、述作の際にこれらを傍らに置きそれをめくりながら潤色に用いたものではなかった。諸書の佳句名文を即

座にたやすく利用できる書は諸書を類聚した類書の一つ、即ち「藝文類聚」であった。』

『史書類、藝文類聚、文選、金光明最勝王經などのほかは、日本書紀の述作に際して、原点にあたって直接利用した書は、従来の定説に比べて甚だ少なく、短句短文の多くは記憶によるものとみるべきである。』

『日本書紀のうち、出典を含まない巻々も偏在し、特に旧辞の多いと推定される冒頭に近い諸巻がそれに相当する。』

『日本書紀の同じ一つのA巻に漢籍Bの文（語句）を利用する場合、即ちBの文が出典である場合、その同じBの文（語句）の接近した部分を同じ日本書紀のA巻（或はA巻に近い巻）のあちこちに利用する傾向がある。』

『語句を中心にして編纂問題を論ずることとは既に諸説にみえるが、適宜に選択した語句によって、或いは歌謡の仮名などによってそれを論ずることは、猶早急にすぎ、語句の面に於いてはむしろ漢籍の潤色度の考察による方法がより確実であろう。——尤もこれだけで編纂問題は解決出来ないが——』

ところで、「隠された歴史（1）」でご紹介した森博達氏の「古代の音韻と日本書紀の成立」は、小島氏が「早急にすぎると指摘した「歌謡の仮名によって編纂問題を論じた」ものです。森氏は、日本書紀の中に仮名表記の違う二種類の歌

謡をそれぞれ包含する二種類のグループの存在を発見し、それをa群とb群と名付けました。a群の中の歌謡では単一の字音体系に基づいて仮名が表記されている。しかもそれは当時の北方音であり中国音そのものである。つまりa群の歌謡は日本語を中国語で音訳した資料であるとします。一方のb群には倭習（和臭）と呼ばれる日本固有の仮名遣い、本居宣

長が言うところの「上代特殊仮名遣」で表記された歌謡が含まれています。ちなみに、a群は巻十四〜二十一（雄略〜用明・崇峻）、巻二十四〜二十七（皇極〜天智）です。b群は巻一〜十三（神代上〜允恭・安康）、巻二十二〜二十三（推古・舒明）、巻二十八〜二十九（天武上・下）です。一方、小島氏も日本書紀の各巻の文章に述作者の違いを見いだしています。

①漢籍を巧みに操り潤色している巻：雄略紀（巻一四）、欽明紀（巻一九）、天智紀（巻二七）

『雄略紀において、文選の順序を巧みに変えた態度は、天智紀の述作態度に等しい。またこの諸日馬賦の一部は欽明紀にもみえ、こうした巻はやはり同一人物の潤色とみるべきであろう。』

②藝文類聚を多く利用し漢文的潤色も多い巻：雄略紀（巻一四）〜欽明紀（巻一九）

『藝文類聚の利用は、大体に於いて、雄略紀（巻一四）より欽明紀（巻一九）あ

たり迄が最も著しく、しかもその諸巻は、
梁書、隋書、文選、金光明最勝王経など、
漢文的潤色の多い表現の見える巻々であ
る。』

- ③文選に直接出展をもつ巻・雄略紀(巻
一四)を中心とする諸巻・巻一一(?)・
一三・一四・一五・一九・
二〇(?)・齊明紀(巻二六)を中心とす
る諸巻・巻二五・二六・二七
④金光明最勝王経によつて潤色された・
巻一五(顕宗紀)・一六・一七・一九・
二〇・二二
⑤後漢書を利用している巻・巻一三・一
五・一六・二二・二五・二七

『日本書紀は史書としての性格上、当然
のこととして、中国史書を盛んに利用す
る。漢書は一般に日本書紀の全巻を通じ
て利用されているが、後漢書の文は、日
本書紀の潤色の多い、中頃の諸巻と、終
わりに近い諸巻に主として利用されてい
る。』

小島氏が挙げた潤色の特色によつて分
類されたそれぞれの巻の大半は、森博達
氏が分類した。群にあたります。例外は、
文選に直接出典を持つとして特徴付けら
れた巻のうち巻一一(仁徳) (?) 巻一三
(允恭・安康)と後漢書を利用している
巻のうち巻一三(允恭・安康) 巻二二(推
古)です。

例外的な巻には注目する必要があると
は思いますが、森氏が推測したようにそ
れが渡来した中国人が編纂したものかど

うかは別にして、述作者の違いが歌謡の
仮名表記だけでなく漢籍の利用におい
ても共通して現れていると判断できると思
います。

「道をゆく」(19)

成瀬和之

「熊野街道」(六)

JR鳳駅の少し北に大鳥大社がありま
す。ここにも、与謝野晶子の歌碑があり
ます。

「和泉なるわがうぶすなの大鳥の宮居
の杉の青きひとむら」です。

「和泉の大鳥大社は私の生まれた地堺
にある「一の宮」です。本殿の前にあ
る美しい杉の木立、その青々とした茂
みは、神が降臨されるのではないかと
思えるほど清々しいです。」

この歌は、一九一四年『時事新報』一
月一日号に、「社頭の杉」と題して寄せた
一三首の内一首です。晶子は、著書『私
の生い立ち』の中で、大鳥大社の鳥居が、
この世のものを超越していると感じた思
い出や夏祭りの楽しさについて書いてい
て、大鳥大社に特別な親しみを感じてい
ることがうかがえます。

歌碑の字は、与謝野晶子倶楽部の名誉
会長だった、作家の田辺聖子(二〇一九
年没)の筆によるものです。

「一の宮」というのは、平安時代の延
喜式に載っている神社の中で最高の地位
にある神社だということです。泉の国の
六二ある式内社の中で大鳥大社の格式が
一番高かったのです。

古代から中世への移行期に院政ととも
に台頭し、平家政権を打ち立てた平清盛
の碑もあります。

「かいこぞよ かへりいでなば 飛び
かけり はぐくみたてよ おおりの神」

「自分は只今卵ですが孵ったら(都へ
帰ったら)大いに飛べるようにお育て下
さい大鳥の神」

一一五九年、平治の乱が都に起こり、
熊野参詣に出かけていた平清盛が引き返
す途次、大鳥大社に参拝し、戦勝を祈願
した時に詠んだ歌です。

明治初年、大鳥大社宮司であつた富岡
鉄斎の筆により建てられた自然石の碑で
す。

大鳥大社を出て、JR阪和線の鳳駅近
くの踏切を渡り、駅前の商店街を南下す
るのが熊野古道です。府道に出て、小川
に沿った小道に入ると右手に森が見えま
す。そこが等乃伎(とのぎ)神社です。

舞町から堺泉北有料自動車の下をくぐ
り信太小学校の前を通ると、いかにも古
い街道筋らしい面影を残した道になりま
す。すると熊野街道は、ようやく聖(ひ
じり)神社の鳥居前に至ります。

そこで大鳥居をくぐり、坂道を登りま
す。鶴山台団地を左に見ながら、さらに

進むと、右手に聖神社への参道がありま
す。

聖神社は信太大明神とも言われ、信太
山の丘陵の西端部に位置する神域一帯は、
かつて「信太の森」と呼ばれ深い森林地
帯でした。静かな森に囲まれて、重要文
化財に指定されている本殿や末社の三神
社などが建っています。ともに桃山時代
を象徴する建物で延喜式内社としての風
格をそなえています。

その信太山に陸軍演習場がつくられ、
戦後も大部分が自衛隊の演習場となりま
した。

天武六年(六七五年)勅願により信太
首(しのだおびと)が聖神(日知りの神、
つまり暦の神)を祀りました。

さかのぼること推古一〇年(六〇二年)、
百濟から僧觀勒(かんろく)が渡来し、日
本に歴本をもたらしました。時を知るに
は、一定の時間を計測する装置が要りま
す。齊明天皇六年(六六〇年)中大兄皇
子は、明日香村の水落遺跡に水時計をつ
くり、日本で初めて民に時を知らせまし
た。それから一五年後に聖神が祭られた
のですから、時代が照合しています。

大鳥居まで戻り、南に歩いてすぐの路
地を左に入ると「篠田王子跡」の石碑が
あります。信太王子とも称し、『熊野御幸
記』に藤原定家も、「シノダの明神に参ず」
と書いています。

JR北信太駅から南西三〇〇メートル
の所に葛葉稻荷神社があります。鳥居の

横には狛犬の代わりに狐が迎えてくれます。

楠の大樹の茂る神社は、信太首（しのだおびと）の後裔が守護神として聖神社を分祀したと言われます。近世以降、この神社が有名になったのは、いわゆる「葛の葉狐」の伝承によります。摂津国阿倍野に住んでいた安倍安名が信太の森の狐（葛の葉姫）と情を交わし、あの陰陽師の安倍晴明が生まれたという話です。古浄瑠璃「信太妻」や義太夫「蘆屋道満大内鑑」などの名作として結実しました。古川柳には「晴明が尻を安名はさぐつて見（息子にも尾があるかと）」というまでありま。

JR阪和線の踏切を渡って、前回の「信太王子跡」まで戻り、熊野街道を南下し、郵便局（和泉山手郵便局）の方へ右折すると、その近くに幸第二集会所や酒屋さん（野端酒店の看板が目印になります）があります。その横の公園内に「承久の変」で有名な後鳥羽院歌碑と説明板が立っています。少しわかりにくいですが、ここが平松王子行宮跡と言われます。

「平松は また雲深く たちにけりあけ行く鐘は なにはあたりか」と後鳥羽上皇歌碑には書かれています。

熊野街道に戻り、少し南下すると放光池（ほうこういけ）公園の手前の交差点に「平松王子跡」を示す石碑が、これもまた目立たないように立っています。

公園から熊野街道をさらに南下して行くと陸上自衛隊の信太山駐屯地が見えて

きます。

信太山駐屯地は、元陸軍野砲兵第四連隊で、元陸軍演習場でした。一八九八年（明治三十一年）摂津河内和泉軍事大演習を明治天皇が指揮し、その際に馬を下りて見下ろしたという高台が、すぐ南側の黒鳥山公園の中にあります。そこに天皇駐蹕（ちゅうひつ）碑が建っています。一九八四年からの日清戦争に勝ち、日露戦争に向かって軍国主義の道をまっしぐらに進み始めた時代の一つの象徴です。その四年後の一九〇二年には無謀な雪中行軍で二〇〇人近い陸軍将兵が遭難死した「八甲田山死の彷徨」が行われました。新田次郎の小説で有名になり映画にもなりました。さらにその二年後の一九〇四年日露戦争は勃発しました。

一九二五年治安維持法が制定され、一九二八年には勅令で、それが死刑法になりました。そして、一九三二年九月日本は「満州事変」を起こし、中国に対する一五年に及ぶ侵略戦争を始めました。日本にも戦争やファシズムに反対する運動は存在しました。治安維持法の改悪に反対した京都の山本宣治が右翼に暗殺されたのは一九二九年でした。その他にも、元海軍兵士阪口喜一郎たちの反戦運動がありました。

黒鳥山公園の東側の入り口の脇に、天皇駐蹕碑に対峙するかのようには阪口喜一郎顕彰碑が立てられています。石碑には、「反戦平和不屈の兵士」と刻まれています。

す。

阪口喜一郎は、一九〇二年和泉市に生まれ、十八歳の時に海軍に志願し、一九二七年ごろには二等機関兵曹という下士官に昇進しました。

阪口たちは、海軍内でひそかに社会科学研究会をつくり、資本主義の矛盾にめざめ、なぜ戦争が起こるのかを深く考えていきました。一九三一年八月治安維持法違反の容疑で憲兵隊に逮捕され、証拠不十分で釈放されましたが、海軍を追放されました。海軍を追放された坂口らは、一九三二年二月大日本帝国海軍最大の軍港、呉（広島県）で「聳ゆるマスト」という新聞をひそかに発行し、中国侵略戦争反対、下士官や水兵の待遇改善を訴えました。その年の一月、阪口は憲兵隊に検挙され、一九三三年広島刑務所で看守たちに殴り殺されました。その時三二歳でした。コロナ危機の中で「自粛警察」というのが現れましたが、「非国民扱い」が連想されて嫌な気持ちになりました。

一九二三年の関東大震災の時の「自警団」が思い起こされました。阪口喜一郎の遺骨は、和泉市の故郷に返されましたが、戦争に反対したということ「非国民」扱いにされ、墓はつくられませんでした。阪口の墓が建てられたのは、戦後一〇年目、阪口が殺されてから二三年目にあたる一九五五年のことです。一九八二年、全国から集まった寄付金で阪口喜一郎記念碑がようやく建て

られたのです。

日本学術会議の推薦した会員候補六人の任命拒否が問題となっています。「学問の自由」を憲法に規定した国はドイツ・イタリア・日本など少数にとどまります。アメリカやイギリスも「言論の自由」に含まれていると解釈されています。なぜ日本国憲法の二三条に「学問の自由」が明記されたのでしょうか？ それは一九三三年の滝川事件、一九三五年の天皇機関説事件など学問の自由が踏みじられた歴史があったからです。学問の自由がないと教育も歪められます。戦争への道が言論弾圧とともに進んだ戦前の歴史への反省から、戦後になって学術会議の「政府からの独立」が学術会議法に明記されたのです。

私たち国民は、ドイツのマルティン・ニーメラー牧師の警句を思い起こすべきでしょう。

「ナチスが最初共産主義者を攻撃したとき、私は声をあげなかった 私は共産主義者ではなかったから。」

社会民主主義者が牢獄に入れられたとき、私は声をあげなかった 私は社会民主主義者ではなかったから。

彼らが労働組合員たちを攻撃したとき、私は声をあげなかった 私は労働組合員ではなかったから。

そして、彼らが私を攻撃したとき、私のために声をあげる者は、誰一人残っていません。

▼今回も執筆者の協力のおかげで無事に「芥川たより166号」を出すことができた。編集担当としてはホッとしている。とりあえず編集の仕事はホッとできるのだが、巷の様子はそうもいかぬ。あいかわらずさわさわとした空気が漂っている。

▼「日本語の無力化・形骸化を深く憂慮します。頼むから日本語をこれ以上痛めつけないでください。」

これは「らぬき言葉」など若者の日本語が乱れていることを憂えて発せられた言葉ではない。この国の指導者たちに対して日本語の破壊が目にすることを憂慮して発せられた言葉である。今、話題となっている学術会議会員の任命拒否での政府答弁のみならず、前政権以来、「モリカケ」問題をはじめと多くの問題が生ずるたびに政府は無効で無内容な言い逃れを重ねてきた。明らかな矛盾ともいえることにも論理的にきちんと答えることなく婉曲法と論点回避と朦朧たる曖昧性を駆使して、あたかも何事かを答えたかのように見せかけることに終始していたといつてよい。

いうまでもないことながら日本語にはきちんとした論理性に基づいて豊かなコミュニケーションを担う力が十分備わっている。それにも関わらず、見せかけの形式に空疎な内容を盛り込んだ発言が今後も横行するならば、日本語そのものの力が低下する。そのことを先の言葉は愛いたのである。日本人として大事に取り扱うべき

日本語を小バカにしたような態度を、それも国会の場で、これ以上とらなないでいただきたい。

発信元は上代文学会。主に「古事記」「日本書紀」「万葉集」「日本霊異記」など奈良時代の文学と言語を研究する人たちの集まりである。言語表現を扱う学会として、この間のことは看過できる状態ではなかったのだろう。冒頭の言葉は学術会議会員の任命拒否に対して出された抗議声明の一節である。学会声明に珍しい「頼むから」の言葉に痛切な思いがにじむ。

▼かつてイギリスの作家ジョージ・オーウェルは「動物農場 (Animal Farm)」で興味深いことを書いている。よく知られているように「おとぎばなし」という副題が付けられたこの小説は農場経営者の苛酷な経営に対して動物たちが動物革命を起こした物語である。農場主は追放され動物たちの自主管理する「動物農場」が生まれ、彼らの中で最も諸能力が高いとされた豚が指導者となって「動物農場」は運営されていく。当初は理想社会の実現と見えたが、やがて権力闘争が生まれ、その末に独裁体制が確立する。体制維持のため粛清テロがなされ、言論統制もされ、彼らの憲法にあたる「七戒」も次々に改ざんされる。ついには「二本足で歩くものはすべて敵」であったのに、豚たちは人間相手に商売を始め、ついには人間と豚とが見分けが付かなくなつたというところで物語は終わる。

物語のあらすじを読んで「ははーん」と思われた人の大半は「これは反ソ連・反共産主義の小説なのだ」と推測されたに違いない。事実、この作品によってジョージ・オーウェルは反

ソ・反共の作家というレッテルを貼られている。作者の思いとは少し異なるのだが、そのイメージは一九四五年の出版以来ほとんど変わることはない。

さて、それはともかく今ふれておきたいのは「七戒」の改ざんのことである。これは条文の最後に「但し書き」を加えることでなされた。「動物はベッドで寝るべからず」であったのが、豚が人間のようにベッドを使うようになると「シートを用いては」が加わる。「酒を飲むべからず」は豚が酒を飲むようになると「過度には」が加わる。「他の動物を殺すべからず」も粛清が始まると「理由なしには」が加わる。これらの追加の但し書きは原文では「with sheets」「to excess」「without cause」とそれぞれ二語の句

からなり、これを文の末尾に加えるだけで、おとぎ話の魔法のように禁止事項が限定的な許可を示す条文となってしまう。きわめつきは第七條「すべての動物は平等である」に「しかし、ある動物は他の動物よりもっと平等である」を加えたことである。この言葉によって「平等」という語がほとんど無意味もしくは真逆の意味にされる。こうした言葉の使い方によって自由で平等、そして平和な理想の社会であったはずの「動物農場」は徐々にデイストピア(理想郷つまりユートピアとは逆の世界)の世界と化していった。

政治の墮落はなにも言語の墮落として現象し、この二つの墮落は不可分の関係にある、とジョージ・オーウェルはいっているのだ。日本語がどんなに扱われている現実こそすでに日本の政治が墮落している何よりの証しな

のだとジョージ・オーウェルならばいうに違いない。そして、その点こそ上代文学会の人たちが警告を発していることなのである。

▼コロナ禍で右往左往している間にも秋は深まりつつある。読書の秋である。こうしたときはふだん読むことのできなかった本でも開いてみるのもよい。思わぬ発見がある。たとえば最近ではシェイクスピアの戯曲「ヘンリー六世」にある次の言葉。

「イングランドを再び偉大な国に

(Make England great again)。

どこかで聞いた言葉だ。そうトランプ大統領の「Make America great again」である。この言葉は借り物であったのだ。シェイクスピアは王位をねらう人物の意向を受け民衆を暴動へと駆り立てる男のセリフとしてこの言葉を書いている。民衆を扇動する男はこの言葉に続いて「過去はすべて消し去れ」「インテリは我々の敵だ。フランス語を話す奴は吊るせ」とさらさらにおおる。過去の切り捨てと反知性主義、そして国を分断する言動。みごとに現代の様相に似通っているのに驚く。この「イングランドを再び偉大な国に」という言葉は「暴君―シェイクスピアの政治学」(ステイブン・グリーンブラッド 河合祥一郎訳 岩波新書 2020年)によって知った。こういう「言葉」との思わぬ出会いがあるから読書はやめられぬ。

暴風と海との恋を見ましたか

反戦の川柳作家・鶴彬(つる あきら)の若い頃の歌である。若いといっても、川柳を武器に戦い抜いた彼の一生は、二十九年という短い生涯であった。ふるさとの『鶴彬を顕彰する会』のパンフレットにはこう書かれている。

『喜多一二(後の鶴彬)は、一九〇九(明治四十二年)一月一日、石川県かほく市(旧 石川県河北郡高松村)の竹細工職人・喜多松太郎、寿ずの次男として生まれた。

二十九年という短い生涯に、革新川柳人として一〇〇〇余句の川柳、十八編の詩、九十四編の評論を残した。治安維持法で二回検挙。東京の特高警察に収監のまま赤痢に罹って獄死した。

この間、大阪の町工場で働く。その後、上京し川柳の総本山と言われた井上剣花坊の庇護を受け、最大の柳誌「川柳人」に「僕らは何をなすべきや」を発表。プロレタリア川柳を宣言する。

金沢第七連隊入隊後、「無産青年」持ち込みにより、赤化事件として懲役二年の判決を受け大阪城内の衛戍監獄に投獄される。除隊後約四年間、反戦・反権力の川柳、貧困との戦いに終始するが、昭和十二年十二月、大阪の川柳人「三味線草」の森鷗牛子の密告により検挙される。東京・野方署に収

監のまま豊多摩病院で昭和十三年九月十四日、無念の死を遂げた。骨は兄の孝雄が引き取り、現在、岩手県盛岡市の光照寺の墓に眠っている』

鶴彬の代表句に、次のような句がある。

静な夜口笛の消え去る淋しさ

燐寸の棒の燃焼にも似た生命

皺に宿る淋しい影よ母よ

暴風と海との恋を見ましたか

退けば飢ゆるばかりなり前へ出る

夕方の電車弁当殻のシンフォニー

軍神の像の真下の失業者

ふるさととは病ひと一しよに帰ると

こ

銃剣で奪った美田の移民村

玉の井に模範女工のなれの果て

ざん壕で読む妹を売る手紙

修身にない孝行で淫売婦

枯れ芝よ！団結をして春をまつ

吸ひに行く―姉を殺した綿くずを

タマ除けを産めよ殖やせよ

勲章をやろう

召集兵士土産待つ子を夢にみる

高粱の実りへ戦車と靴の鋏

屍のないニュース映画で勇ましい

出征の門標があつてがらんだうの小店

万歳とあげて行った手を

大陸において来た

手と足をもいだ丸太にしてかへし

胎内の動き知るところ骨がつき

今年八月、第二十五回鶴彬川柳大賞

の募集があつた。四五四句の応募があり、九月十三日かほく市で行われた碑

前祭で、大賞一、優秀賞三、佳作五、入選九十一の計一〇〇句の発表があ

つた。私の投句した、

八月の遠くて近い鶴彬

は佳作に選ばれた。

安倍晋三氏が総理の座を退いたからといって、この国の未来が明るくな

ったわけではない。スガ政治は、叩き上げた陰險な遣り口と権謀術数を駆

使してアベ政治を上回る危険な道を歩き始めた。

鶴彬は今もなお、遠くて近い存在である。

俳句

土田 裕

この町が終の栖や後の月
国境も税関もなし鳥渡る

目つぶれば鳥語にぎやか小春かな
災害のテレビ報道肌寒し

不漁とや秋刀魚の煙細りけり

影山 武司

晩鐘の余韻へ釣瓶落しかな

アラベスクの埋まる壁や棗の実
野仏の姿頭はに野分かな

権宮司の白き水千秋日透く
神楽笛吹く指の反り空高し

舟歌の響く運河や三日月

ゴスペルの和音の響く暮の秋
歪みたる葛屋の梁のいとどかな

角打ちの枺に溢るる新走り
そぞろ寒通過列車の待ち時間